資料

ともいき×メタバース研究会について

ともに生きる

令和８年８月27日
神奈川県福祉子どもみらい局　共生推進本部室

Agenda

I.　委員紹介

II. メタバース研究会について

III.県のメタバース事業について

IV.情報共有など

Agenda

I. 委員紹介

II. メタバース研究会について

III.県のメタバース事業について

IV.情報共有など

Agenda

I. 委員紹介

II. メタバース研究会について

III.県のメタバース事業について

IV.情報共有など

1　メタバース研究会

（1）　立ち上げの背景

〇支援が必要な人たちだけでなく、全ての人にとって暮らしやすい社会（＝共生社会）の実現に向けて、公助（公的サービス）に加え、自助・共助（お互いさま・ごちゃまぜ）による対応が必要！

〇視点を変えた新たな手法による“生きづらさ”の解消が必要 ！（新たなテクノロジーの活用等）

→令和4年12月　ともいきメタバース研究会を立ち上げ

（2）　ともいきメタバース研究会

メタバースの活用により、イコールフッティング（＝競争条件が同じになること）や新たなつながりの創出による効果を期待しているが、行政による実現可能性と、「ともに生きる社会かながわ」の実現にどのようにつながるのか等について研究する。

（第１回研究会資料より抜粋）

これまで当事者の抱える課題、試行的事業の実施状況、これからのメタバースの活用について、幅広に議論を行ってきた。

１　メタバース研究会

令和6年度からの方針

委員の経験や知見、県の試行的事業の取組を通じて、
生きづらさの解消、ともに生きる社会の実現に向けて

・これからのメタバースの活用について

・メタバースに限らず、上記の目的を達成するための
新たなテクノロジーや手段

について幅広く議論、研究する。

Agenda

I. 委員紹介

II. メタバース研究会について

III.県のメタバース事業について

IV.情報共有など

2　県のメタバース関連事業

令和６年度から同ワールド内で実施（２課合同事業）

ともいきメタバース講習会

(共生)



社会参加の機会を増やすことを目的に障がいのある方を対象に、アバター作成やデジタルイラストの作り方を学ぶ講習会と発表の場としてのメタバースアートワールドの開催

→令和７年度で事業終了

“つながり発見”パーク

(青少年課)



ひきこもりの方が、メタバース内で気軽に他者と交流できる仕組みや居場所としてのイベント実施。
また、就労に関する情報の掲示や相談員の配置により、社会参加への意識を高め、リアル就労支援などにつなげる機会を創出。

ともいきメタバースFiKA

(共生)



生きづらさを抱える方を対象にメタバース空間でゆったりとアバター姿で語らう場を創出（FiKA）

ともいきメタバースWS：フリースクールや子ども医療センターなどでメタバースを楽しみながら体験できる機会を提供（WS）→令和７年度で事業終了

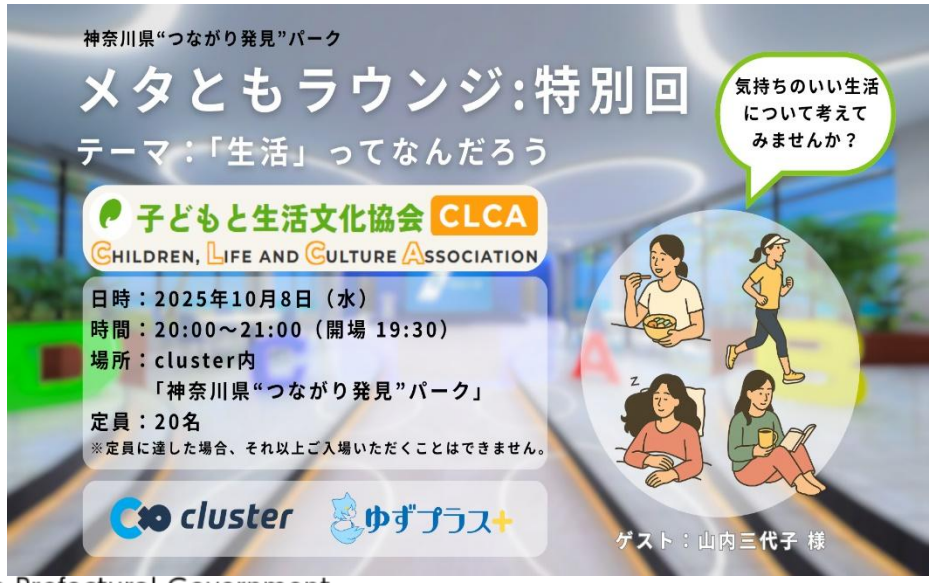
3　令和７年度事業実施結果について

事業名	参加人数	実施内容	回数	社会参加意識
ともいきメタバース講習会	98人	• アバター制作（アバターカード） • アバター、生成 AI を使った2、4コマまんが制作	10施設 10回	参加者の約86%がメタバースを利用して社会参加したいと回答
“つながり発見”パーク	延べ 6,797人	1. 参加者からのメッセージの掲示、ミニゲーム、情報コーナー 2. 参加者同士の交流イベント 3. 困りごとへの個別相談	1. 常設 2. 全18回 3. 全6回	アンケートに回答したひきこもり当事者128名のうち、113名（88.3%）が社会参加への意識が高まったと回答
ともいきメタバースFiKA	申込者数 19人	対話（グループエンカウンター）を中心にしたプログラム 特別回として鎌倉材木座海岸で対面で焚火を囲みながら実施	全8回	最終回に参加した4名の内、2名はひきこもり推定者であり、外出に至った
ともいきメタバースWS	121人	小学生からでも楽しく参加できるように、楽しんでもらえるアクティビティ（冒険ツアー・鬼ごっこ）を通じてメタバース空間を体験してもらう機会を提供	1. フリースクール生徒 2. 一般参加 3. 子ども医療センター	参加者の91%がメタバースを利用して社会参加したいと回答

3　令和７年度事業実施結果について

課題と振り返り(“つながり発見”パーク)

- 交流イベント（特別回）でひきこもり支援団体と連携し、団体活動へのリアル参加を呼びかけたが、それ以外に社会参加につなげるコンテンツがなかった。→社会参加を促すコンテンツが必要
- イベント時以外で、来場者同士の交流の場面があまり見られなかった。→交流を促す仕掛けが必要
- 全体として多くの来場者はあったものの、イベントがない日は来場者が少なくなる傾向があり、「孤独を感じてすぐに退出した」との意見があった。→一人でも居心地を良くする工夫が必要





3　令和７年度事業実施結果について

メタバースFIKA

- コメント数とエモート回数の合計を入室UUで除した「UU当たりの反応数」を用いて各回を比較したところ、全体として右肩上がりの傾向が確認された。
- このことから、回を重ねる中で参加者が場に慣れ、発言やリアクションを行いやすい状態が形成されていった可能性が示唆される。実際、各回冒頭のティータイムでは、スタッフによる話題提供を起点としながらも、後半になるにつれて参加者同士の自然な雑談が見られるようになった。
- 調査票アンケートでは、出席回数と心理変化の相関を分析した結果、参加回数が多い参加者ほど、ネガティブ気持ち（不安等）の軽減幅が大きいことが確認された。このことから、単発ではなく「継続して場に参加すること」が、心の安定や安心感の情勢に重要であると考えられる。

反応数

内容	入室UU	コメント数	エモート回数	反応数/UU
第1回「チュートリアル」	53	167	2,110	43.0
第2回「ワールドめぐり」	13	73	756	63.8
第3回「アバターづくり」	13	135	1,042	90.5
第4回「栄養士による講話」	14	151	1,119	90.7
第5回「クイズ大会」	10	108	1,331	143.9
第6回「自分の気持ちについて知ろう」	13	170	1,174	103.4
第7回「メタバースについて知る」	9	150	952	122.4
第8回「振り返り」	11	113	1,108	111.0

調査票前後比較結果

前向きな気持ち

↑上向きに変化

「楽しい」「うれしい」といったポジティブな感情のスコアが、プログラム参加後に上昇した。

不安な気持ちや落ち込み

↓軽くなる傾向

「心配」「怖い」といったネガティブな感情のスコアは、全体として低下（軽減）する傾向が見られた。

さみしさ・孤独感

⇨大きな変化なし

孤独感については、プログラム期間中での大きな数値変動は見られなかった。（終了することへの名残惜しさ等の影響も推測される）

４　令和８年度事業について

- 令和8年度は実施体制としてメタバース空間を共有しつつ、プログラム実施団体は2課それぞれに公募する方法とした
- プロポーザルの結果、青少年課事業は「クラスター×ゆずプラス」で継続、共生事業は「横浜市立大学(児童精神科チーム)」に決定

令和7年度からの主な変更点

〇社会参加につなげるコンテンツの充実

・地域若者サポートステーション（若者の就労支援機関）のスタッフと話せるコーナーの設置、ひきこもり支援団体と連携した交流イベント回数の増（2回→3回）、教育研究機関（大学等）にワールドの一部を貸し出し、イベント等の場として活用

〇来場者同士のコミュニケーションを後押しする常設コンテンツの充実

・釣ったアイテムを図鑑にして、参加者同士で自慢し合える釣りゲーム

〇他に誰もいないときでも孤独を感じない常設コンテンツの充実

・話し相手になるAIアバターの設置、来場者の投稿メッセージを掲示する海辺のつぶやき（誰かがいたことを感じられる）

〇メタバースFIKAは大学としての評価の実施と参加者だけでなく、支援者・サポーターも募集

・令和7年度の結果も含めてメタバース上での支援の遂行可能性や参加者の変化を客観的に評価する

・県内で活動する支援団体やピアサポート団体等とも連携し、プログラム実施者として参画してもらうことで、メタバース上でのプログラム実施の横展開を狙う

6　本日の研究会

委員の皆さまと議論したいこと

○　今年度事業に関するご意見、次年度の方向性に関する所感

○　その他情報提供や今後に対する新たなご提案

など

メタバースワールドのご紹介

（cluster×ゆずプラス）

Agenda

I. 委員紹介

II. メタバース研究会について

III.県のメタバース事業について

IV.情報共有など